

私

から

見

てみれば。

桜空ミヅイロ

言い出したのは私の小学校からの友人だった。

土曜日の晩は私の妹の繭美（マユミ）の家でホットプレートパーティーとDVD大会。

友人は付き合いが小学生の頃からなだけに、姉妹どころか家族ぐるみで仲が良かったので、繭美とも当然仲がいい。

その日はお互いが土曜日ヒマだからという理由だけで、突然1人暮らしをする繭美宅へ押しかけたのだった。

繭美の仕事はサービス業だから、世間一般はお休みの土日の方が忙しい。

夜も遅くなった時間に疲れて帰ってきたら、自分の家でふざけた女が2人ホットプレートと大量の食材を広げているなんて、普通ならどっと疲れるところなんだろうけれど、典型的なO型の繭美は嫌な顔一つせず、さっくりパーティーに参加した。

久しぶりに遊びに来た妹の家は、正社員とはいえサービス業のお給料はそんなにいいものなんだろうかと思うくらい、物が増えていた。

実家住まいの生活なら多少の贅沢もできるんだろうけれど、1人暮らしの上に乗用車を乗り回す繭美にそれ程の贅沢ができるとも思えない。

だいたい女が1人で乗るだけなのに、何であんなに大きな車が要るんだろう。

繭美の車は一家に1台あると便利なサイズのミニバンだった。

私には無駄金をはたいてるとしか思えない。

好きなわけでも、なりたかったわけでもない仕事に就いてから、「やめたい」「今度こそやめる」なんて言い続けて、なんだかんだで数年になる。

そんな嫌々やってる仕事は何年もよく続いているなど思うけれど、きっと本気でやめる気がないんだろう。やめたところで、きっとそれからどうしていいかが分からないんだ。のらりくらりと、将来の事をなにか具体的に考えて学生生活を送ってきたわけではない、怠惰な過去の代償だ。気付いたときにはもう遅い。

おまけに、

「まゆ、あんたお菓子食べるのちょっと控えなよ。」

もともと体格の良かった繭美は仕事と1人暮らしを始めてから、さらに10kgは太っていた。

「そんなに食べてないよ。」

そう言う繭美の部屋には明らかに、必要以上のお菓子が転がっているのが目に付いた。

「じゃあそこらじゅうにあるお菓子は、一体何なのよ。」

「部屋にはたくさんあっても、ちょっとずつしか食べてないって。」

「あまりお菓子ばっかりの食生活じゃ、体にも悪いよー。」

屁理屈を言う繭美に、友人は呑気な口調でそう言った。

「体に悪いどころじゃにわよ。そんなに大きく育っちゃって。」

ぶつくさと小言を言う私にめんどくさくなったのか、繭美はもう何も言わなくなった。

たった1度きりの人生を、なぜ無駄に過ごしてしまう人間がこんなにも多くいるんだろう。

何も考えず、何も行動も起こさず、ただ無益な生活を延々と過ごすなんて、私にはぞっとする人生だ。

私は高校生の頃から、目指す職業を決めて、そのために今の自分はどうすべきなのか、常にそこを考えて生きてきた。おかげで別に大きな偉業を成したわけではないけれど、自分の目指した職業について、忙しいけれど安定した生活を送ってる。

20代も後半に差し掛かったこんな年になって、不安定な自分の人生に頭を悩ませるなんてまっぴらごめんだ。

今まで常に幸せな恋愛をしてきたわけではないけれど・・・というかあまり恋愛運はいい方ではないけれど、それなりに付き合った人だって何人かはいる。

今、結婚までを考える人はこれとってはいいないけれど、男気が全くないわけでもない。

繭は同じ仕事場の社員で、地方から異動になってきた、地元には長年付き合っている婚約者がいるという男と、いつまでたっても煮え切らない、不毛な関係が続けている。

その男自体もぱっとしない、冴えない男だった。

一体この子は人生の何が楽しいんだろう。

将来の自分を想像してみると、不安に駆られる事はないのだろうか。

本当にこのままでいいと思ってるのだろうか。

姉として心配して、あれこれ言っても、妹の繭には鬱陶しい小言でしかないようだった。

仕事場に姉と姉の友人の亜澄（アスミ）さんが来た。

仕事で遅くなる私の部屋の鍵をもらいに来たらしい。

今晚は、私の家でDVD大会をすると、さっきの休憩時間に見たメールにそうあった。

仕事が暇だったせいもあるけれど、少し前まで都会のど真ん中の繁華街で水商売の仕事をしてきた彼女は、こんな田舎町のショッピングセンターでは、よく目立つ、異様な雰囲気を出していたため、お店に来た事はすぐに気が付いた。

店の控えに置いてある自分の荷物から、部屋の鍵を取って姉に渡す。

2人の話を聞いてみれば、DVD大会だけでなくホットプレート大会まで催すらしく、亜澄さんは「温かいご飯を用意して待ってるね」と新妻のような台詞を残して、去っていった。

亜澄さんは姉の小学校からの友人で、私も当然小学校の頃からよく知っていた。

昔から周りの人と同じは嫌いによく言っていた何というか、少し変わった人で、高校を卒業すると同時にこの田舎町を飛び出してからも、久しぶりに聞くと遠い都会の街で、毎回驚くような生活を送っていた。

そんな亜澄さんを姉はいつも呆れた様子で「あの人の考えてる事は分からない」とよく言っていた。でも大人になった今でも、よく一緒にいるところを見ると、仲は良いらしい。

亜澄さんと一緒という事は、今晚のパーティを言い出したのは、きっと亜澄さんだろう。

突然言い出して、突然旅行に行ったり、突然遠い南の島へ住み込みのアルバイトに行くような、突拍子もナイところがある人だったからきっとそうだ。

亜澄さんがそんな調子で突然、この田舎町に帰ってきたのは、1年程前だった。

とある拍子に出会った男性と意気投合し、これから2人で事業を起こしていくのだという。おまけに相手の男性は10歳以上年の離れた妻子持ちだったのだけれど、お互いに惹かれあってしまった2人は、将来の結婚の約束までしてしまい、相手の男性は離婚調停中だという。

相変わらず突拍子もナイ亜澄さんに、姉はやっぱ呆れた様子だった。

確かに突拍子もナイ人だったけれど、そんな自由さが、私は少し羨ましくもあった。

自分の欲望に正直で、自分の願望に向かってあそこまで突っ走れる人というのも中々いないと思う。

現に、私の20数年という短い人生の中だけれども、同じような人を見た事は今までになかった。

仕事が終わって、家に帰り、玄関のドアを開けるといい匂いがしてきた。1人暮らしの生活では中々ない事だけに、少し嬉しくなる。

姉と亜澄さんは、すでに一通り食べてしまった後らしく、ビールを飲みながらDVDを見ていた。

仕事の荷物を片付けて、部屋着に着替えてパーティーに参加する。亜澄さんがホットプレートで出来上がった料理を、皿に取り分けてくれた。

「さっきテレビで、バリの特集がやっててねー。旅行に行きたいな、って話してたところだったんだー。」

亜澄さんの事だから、そう言っていると本当にそのまま行ってしまいそうだな。なんて思っていると、

「何言ってるのよ。亜澄は今行ける状態じゃないじゃない。」

姉が少し気に入らなさそうな様子でそう言った。

姉も旅行が好きなので、2人は今までに何回か一緒に旅行に行っていた。でも亜澄さんがこっちに帰ってきて、例の男性との事業がもっとちゃんとした形になるまでは、ほとんどその男性に養ってもらっている状態らしく、以前水商売をしていた頃程の余裕はないらしい。

姉と一緒に旅行が行けなくなってしまった事だけでなく、今の誰かに依存している状態の亜澄さんが気に入らないのだ。

「まあ今は仕方がないわね。人生こういう我慢の時期だって必要よ。」

びっくりした。

亜澄さんの吐いた台詞とは思えなかった。

今まで見た誰よりも自由に見えて、それでもその自由にも満足なんてしていなくて、この人はいつでも新しい自由を求めているんじゃないかって、勝手な想像だケド、そう思っていた。

そんな亜澄さんが、「我慢も必要」だなんて言うのだ。

「その人のどこが良かったの？」

少しショックを受けたけれど、私は素朴に抱いた疑問を亜澄さんに聞いてみる。

「今まで人より少し多くの男の人を見てきたけれど、あの人の描いていた未来図が、アタシにぴったりだと思ったのよ。」

狭い部屋の中で、それでも少し遠くの方を見ながら亜澄さんはそう言った。

私は今まで、きっと彼女は、自分の将来の中に不安なんて要素は1つもなくて、どんな景色が見えていたとしても、どれもキラキラと輝いているんだろうと、思ってた。

でもそんなキラキラも、目を眩ませるものでしかなくて、眩む景色の向こうにあるものに彼女も不安を抱いたりしていたんだろうか。

そしてその眩む景色の向こうにあるものが、リアルな恐怖になろうとした時に出逢ったのが、その男性だったんだろう。

前に姉が「亜澄は恋愛が絡むと、視界が狭くなる事がある」と言っていた。

それでも私は、亜澄さんがいつかはその人すらも飛び越えて、もっと高く高く飛んでいくんじゃないかなって、密かに思ってる。

きっと今までに知っている世界だけでは、彼女には狭すぎる。

キラキラの向こう側にあるものを、自分の手で確かめに行く、そんな日がいつか来るような、そんな気がしている。

## 燈炉子

---

せっかくの土曜日の晩の予定が無くなった。

母がやっているスナックの客とご飯の予定だったのに、ドタキャンされてしまった。

週末の夜に何もなく、家で過ごすのは好きじゃない。

比較的土日につかまりやすい友人に連絡を取る。すると、小学校からの付き合いの燈炉子（ヒロコ）がちょうど予定も無かったので、会う事になった。

教師をしている燈炉子は平日は忙しそうだけれど、学校が休みである土日はつかまりやすかった。

お昼ごはんを一緒に食べに行き、燈炉子の部屋で一息つく。アタシは漫画を読みながらゴロゴロしていたけれど、平日に家の事なんてする余裕の無い燈炉子は、部屋の掃除や片付けで忙しそうだった。

そんな燈炉子と違って呑気なアタシは、今晚は何をするか、しか考えてなかった。

「今晚どうするー？」

掃除機をかけ終えて、台所の掃除をしている燈炉子に聞いた。

「どうするも何も、とりあえず実家に帰らなきゃ。ここしばらく帰ってなかったから、お母さんから苦情のメールが来てんのよ。」

燈炉子は実家から車で1時間ほど離れた、勤務先の学校の近くで1人暮らしをしている。仕事が休みの日はちよくちよく実家に帰っていた。

「じゃあさ、DVD大会でもしない？晩御飯も家で鍋とかしてさ。キムチ鍋がイイなー。」

お昼ごはんも食べたばかりなのに、もう晩御飯の話をしていた。呆れるほどの食い意地は自分でもどうかとは思いうし、お腹はいっぱいだケド、無性にキムチ鍋が食べたかった。

「いいケド、それなら実家じゃなくて、まゆの家にしない？鍋なら人数も多い方がいいし。」

「じゃあまゆちゃんちでDVD大会にしよー。」

退屈になりそうだった週末の夜が、急に楽しみなものになってきた。予定も埋まって、上機嫌なアタシは晩に見るDVDは何を借りようか？そればかりを考えていた。

まゆちゃんの家近くのレンタルビデオ店で、結局DVDを5枚も借りた。1晩で見れるわけもないけれど、5枚借りたら安くなると、店員さんに勧められたからだった。

燈炉子が見てみたかったという、少し前にレンタルが開始された洋画と、昔に流行った誰でも知っている洋画に、これも誰でも知っているアニメ、後はアタシが見たかった、マニアックな邦画が2枚だった。

まゆちゃんの家に向かう途中、彼女に話になった。

「まだあの冴えない男と会ってるらしいのよ。」

冴えない男とは、まゆちゃんと同じ職場の人間で、地元には婚約者がいるという人間だった。「そうなの？前に話したときにはもう会わないって言ってなかった？」  
「口だけよ、口だけ。仕事だっていい加減にしかしてないし、あの人が本当にこれからどうするつもりなんだか。」

燈炉子の小言が始まった。たしかにまゆちゃんは、少し前から今の仕事を辞めたがっているらしく、その事を周りにもこぼしていたんだケド、一向に辞める気配は無い。

学生の頃から目指していた職業に就いて、誰から見ても安定した人生を送っている燈炉子からすれば、そんな妹が中途半端な怠け者にしか見えないんだろう。それに加え、基本的に人を見下した言い方をする傾向のある燈炉子が、一旦こういった話になると、容赦なくズバズバとした物の言い方になるのだ。

「大体たいした稼ぎも無いのに、いきなり1人暮らしなんか始めて。ただでさえあんな大きな車に乗ってるくせに、考えが甘すぎなのよ。」

アタシは結果論で物事を考えてしまう人間だから、まゆちゃんがどんな収入で、どんな生活を送ってようが、結果的に彼女が独りで生活ができているなら、それで良いんじゃないかと思う。

思うけれど、口には出さない。出したところで、物事は何も変わらない。

人それぞれ色々な事を考えていて、色々な行き方があるんだから、自分以外の誰かの生き方を何とかしようとしたって、仕方の無い事だとアタシは思う。

大体小言を言ったり、叱ったりするって言うのは、思いのほか疲れる。それに自分が言った事によって、その場の雰囲気が悪くなって、気まずい思いをする事になってしまったら、さらに疲れてしまう。

そんなの真っ平ごめんだ。

でも小言を言う人間ってというのは、実は優しい人間なんじゃないかな。とも思う。

言われてる側からしてみれば、鬱陶しくて、面倒くさいものでしかないんだろうけれど、少なくとも言ってる側は相手をもっと良くなるように、言わばアドバイスをしてくれているんだから。

何も言わないアタシのような人間が一見、優しい人間だなんて思われがちだけれど、実は相手の事を考えていてくれるのは、そんな小言を「言ってくれる」人間なんだろう。

まあそれでも言われてる側は、気持ちよく聞けるものでもないんだけど。

晩御飯のキムチ鍋が急遽、ホットプレートパーティーになり、たくさんの食材を焼いては食べ、DVDを見ていたら、気が付けば夜中のいい時間になっていて、誰からともなく寝てしまっ

いた。

結局見れたDVDはアタシが見たかった邦画以外の、2枚だけだった。

翌日の朝、お昼前に起きたアタシと燈炉子はとりあえず部屋の片付けを始めた。昨日の食べた食材のゴミを片付けながら燈炉子が、

「まゆ、今日結局遅刻してったのよ。」

と言った。

「そうなの？仕事だったのに遅くまで付き合わせちゃって、悪い事しちゃったな。」

アタシ達は休みでも、彼女はそうじゃなかったんだから、もうちょっと時間とか考えてあげればよかった。アタシは心の中でそう反省していた。

「アタシ達が悪いんじゃないくて、あの子がたるんでんのよ。自己管理ぐらいもうできる歳じゃない。ホント腐ってるわ、あの子。」

あ、そこまで言うんだ。アタシは残念な気持ちでいっぱいだった。

小言を言う人間は実は相手のために思っていてくれて、そう思って小言を「言ってくれる」気持ちは優しいものだけれど、どれだけ優しい気持ちからのものでも、ようはものの言い方一つだ。

いくら相手の事を思って言っている、結局人を見下した言い方をしていれば、相手の心に届く事はない。

それほど無駄な事なんて、ないんじゃないかな。と、思う。

なんだか残念な感じだな。

そう思いながら、燈炉子には何も返さず、アタシは洗い物を続けた。

初めての身内の結婚式にどうしていいかわからず、でもかといって自分ができる事もなさそうなので、友人に囲まれ祝福される姉をぼんやり眺めていた。

結婚式なんて結局は身内はそっちのけで、主役の新郎新婦に次ぐ準主役は、その日わざわざ身銭を切ってお祝いに駆けつけた友人達だ。

私達はただそれを見守るだけ。

急な出来事にぶつぶつと文句を言いながらも駆け足で準備を進め、やっと今日の日を迎えられた燈炉子お姉ちゃんは、なんだかんだで幸せそうだった。

会場を決めるために揉めては、ぶつぶつと文句を言い、  
自分に似合う衣装が無いと言っては、ぶつぶつと文句を言い、  
引き出物を選ぶのに旦那さんと意見が分かれては、ぶつぶつと文句を言い、  
今朝は自分の肌の調子が良くないと、やっぱり文句を言っていた。

一週間くらい前だったか、あまりに文句ばかり言っている燈炉子お姉ちゃんに聞いてみた事があった。

「そんなに文句を言ってまでするものなの？結婚式って。」

文句を聞かされる私達もいい加減面倒くさくなってくるし、一体めでたい事なのか、そうでないのか分からなくなってくる。

「結婚式なんてね、自分のためにするもんじゃないわよ。親のためにするよなものなの。私は長女なんだから、尚更よ。」

と、さらっと言った。責任感が強く、まっとうな道を歩いてきた姉らしい考え方だなと思った。

ただ半年ほど前に、今横にいる旦那さんを連れてきて、突然「結婚する」と言った時は驚いた。

ワケを聞いてみれば、お腹に子供がいるんだという。仕事で転勤になって、引っ越したばかりの大変な時期に思いも寄らぬ出来事で、何事も計画的に生きてきた燈炉子お姉ちゃんには、めずらしい事だった。

きっと本人にも計画外の出来事だったと思う。

両親も始めは少し苦い顔をしてはいたけれど、今となっては初孫の誕生が待ち遠しくて仕方ないらしい。母親なんて気が早く、実家にはすでにたくさんの新生児グッズが揃えられていた。

チャペルでの式も終わり、披露宴が始まった。

親族のテーブルに座る私の横の席は空席のままだった。披露宴が始まった直後に携帯が鳴った

繭美お姉ちゃんが、まだ戻ってこない。もう30分は経っている。

会場では旦那さんの友人代表スピーチが終わり、姉の友人の番になった。

亜澄さんのスピーチは女の友人だとありがちな泣き出してしまい、何を言っているのか分からなくなるようなものではなく、姉の事を知らない人が聞いていても分かりやすい、簡単だけれど、でもとてもステキなスピーチだった。

宝くじを当て、一生暮らせるだけの資金を突然手に入れた亜澄さんは、今はついこの間結婚した少し年の離れた旦那さんと、世界中を旅している。

さらに旅先で出逢った人達や、起こった出来事などのエッセイを書いている、日本ではとても人気のエッセイだった。亜澄さんのそのエッセイ集はどこの本屋でも店頭で山積みになっていた。

「そんな事しなくたって、十分なお金を持っているのに。」

と私が言うと、

「今ある現状に簡単に満足しないあの人らしい。」

と、燈炉子お姉ちゃんは言っていた。

元々がしっかりした人だったけれど、世界中を回って、さらにちょっとやそっとの事では怯んだりしなくなったであろう、亜澄さんにスピーチを頼んだのは、正解だったみたいだ。

スピーチの途中で繭美お姉ちゃんが帰ってきた。

「遅いよ、亜澄さんのスピーチ始まっちゃってるよ。」

私は小声でそう言った。

「ごめんごめん、クライアントからの電話だったから。私、式が終わったらすぐ事務所に行かなきゃ。」

「そうなの？忙しそうだね。」

繭美お姉ちゃんは昔からパソコンを触るのが好きで、誰よりも詳しかった。

そんな繭美お姉ちゃんの腕に目を留めた友人に、「一緒にパソコンのソフトやアプリを制作する会社を立ち上げないか」と、誘われたらしい。

機械関係に疎い私にはさっぱり分からないけれど、2人で始めたその小さな会社はそこそこ波に乗ってきているらしく、最近の繭美お姉ちゃんはとても忙しそうだったけれど、以前に比べたらとても生き生きとしていた。

「亜澄さんすごいね。こんな大勢の前で話しているのに、全然緊張していなさそう。原稿だって持ってないし、あの場で即席で話してるのかな。」

堂々とした様子の姉の友人をそう誉めると、

「まさか。あのスピーチの練習に私が何回つき合わされたと思ってんのよ。亜澄さん、あれでい

てだいぶ緊張してるよ。ただそれを見せないのが上手なの。」

「そうなの？じゃあ話す事も全部考えてあったものなの？」

「そうよ。ただよくありがちな、原稿を見ながら俯いて話すのが嫌だったんだって。人の結婚式に行く度に、誰に宛てて話してんだ！って突っ込みたくなるって言った。」

けらけらと笑いながら繭美お姉ちゃんはそう言った。

そうだとしても、そんな裏事情を感じさせない亜澄さんの態度はやっぱりすごいなあと感心していたら、隣の繭美お姉ちゃんの携帯のバイブがまた鳴った。

「・・・。」

ディスプレイを見たけれど、繭美お姉ちゃんが出る様子も無い。

「出なくていいの？仕事なんじゃないの？」

不思議に思った私はそう聞いてみた。

「クライアントじゃないから大丈夫。さすがに何回も席を立つわけにも行かないし、式が終わってから掛けなおすわ。」

「大変だね。こんな日にまで。」

「仕方ないわよ。2人だけでやってるから、任せられる人もいないし。」

そう言いながらも、繭美お姉ちゃんは笑顔だった。

「仕事楽しい？」

私がそう聞くと、

「じゃないとこんな生活、やってられないよ。」

やっぱり笑顔だった。

亜澄さんのスピーチも終わり、披露宴はそれからも滞りなく無事終わった。

主役の2人が会場を退場し、友人達も退出して最期に私達親族が出て行くと、燈炉子お姉ちゃんと亜澄さんが出口のところで話していた。

その2人のところへ繭美お姉ちゃんが当たり前のように入っていった。

3人で話す様子はとても楽しそうで、見てるこっちが羨ましくなる程だった。

2人の姉とその友人は、少し年の離れた末っ子の私から見ても、全くバラバラのタイプの人間だ。

今までの生き方も、自分が選んだこれからの生き方も、全く違う。

「未来（ミキ）！そんな所で何やってんの？ちょっと写真撮ってくれない？」

燈炉子お姉ちゃんにそう言われて、デジカメを預かる。

思いもよらぬ形でも、人生の永久就職も決まり、新しい命も楽しみな燈炉子お姉ちゃんの顔。やりがいのある仕事に出逢い、昔よりも忙しい日々を送りながらも、生き生きとした繭美お

姉ちゃんの顔。

今までの狭い世界を飛び出し、未だ広がる未知の世界に心躍らせて、期待に満ち溢れた亜澄さんの顔。

カメラ越しに見える3人はとても楽しそう。

それぞれ見ているものは違うけれど、3人の顔はとても幸せそうだった。

それはもう、本当に。